

2023年橋田賞（長編）応募作品

H
O
M
E

大沢ケイト

【人物一覧表】

松田慎司（37）市職員

佐倉晃太（22）コンビニ店員

大橋充男（80）大橋家の主人

大橋史子（77）充男の妻

大橋 秀（50）充男の息子

竹山 祐（26）松田の部下

木島（50）秀の同級生

【あらすじ】

市職員の松田慎司は大橋家に道路拡張工事のため立ち退きを要請するが、家にさえ上げてもらえず交渉は難航。大橋充男は「死んでもこの地から離れない」と断言する。工事の着工も迫り焦る松田はコンビニで見かけた充男の妻・史子を説得しようとする。ところがコンビニ店員の佐倉晃太に老人を食い物にする詐欺と疑われ、また同じく立ち退きを要請した木島の息子にも追い回される。市職員であることを晃太に明らかにした松田は晃太が大橋家に興味を持っていることを不審に思い、逆に問いただす。晃太は大橋夫妻の一人息子・秀の継子だった。松田は晃太に大橋夫妻への取り成しを頼むが、晃太ははぐらかす。手首を骨折した史子を助けた松田は大橋家に初めて足を踏み入れる。だが夫妻はこの家から引っ越さないという姿勢を崩さない。松田は夫妻の息子・秀が二十年前に結婚を夫妻に反対され駆け落ちしたのだと聞く。秀は生き

ているらしい。松田は秀に夫妻を説得しても
らえないかと晃太に持ちかけるが晃太は明言
をさける。そんな折、充男が家で倒れ、病院
に運ばれる。退院した充男は、家を売り、二
人で施設に入ろうと史子を誘うが史子は拒否。
一方、晃太は大橋夫妻に「秀を連れてくる」
と宣言。だが秀は現れず、失意の史子は家出。
迎えに来た晃太に秀の面影を見た史子は秀を
心配する晃太に胸を打たれる。家に戻った史
子と充男、松田と晃太で秀を誘い出すために
一計を案じ、秀をおびきだす。秀はやってく
るが、鬱で仕事もやめており、合わせる顔が
無いと言う。が、充男が頭を下げ、史子も温
かく迎えたことで親子のわだかまりがとけ、
再会を喜ぶ。家を手放すことを決意した大橋
夫妻だったが、松田はいつの間にか自分の実
家のように思っていたと告白。史子は自分の
実家だと思っただけでも来てくれと松田に言
うのだった。

○大橋家・玄関前

六月。

和風建築の家の引き戸の玄関。

「大橋」の表札がかかっている。

史子の声「ちよつとあなた、乱暴はダメ！」

松田の声「大橋さん、お話だけでも聞いても

らえませんか」

玄関の引き戸が勢いよく開き、

家の中から松田慎司(37)、竹山祐(2

6)が大橋充男(80)に追い出され

て出てくる。

後から大橋史子(77)がついてくる。

充男、興奮して、

充男「なんべん来られても返事は一緒なん

だ！ 僕たちはここを動く気はない！」

史子「あなた、そんなに怒鳴らないで」

松田「大橋さん、そこを何とか」

竹山、前に出て

竹山「大橋さん、この道路拡張工事でこの前

の道は歩道も作られて安全になるんですよ。

それにとっても便利になるんです」

充男「その便利になる土地から引越せて

あんたたちは言ってるんじゃないか」

竹山「まあ、そうですね」

史子「お若い人。うちはもう五十年以上、あ

なたが生まれる前からここに住んでいるん

です。今さらよそへ移れなんて言われる筋

合いはございません」

竹山「松田さん」

松田「それについては本当に申し訳ないと思

っております。ですが、」

充男「帰ってください。もうあなたたちと話

すことはありません」

充男と史子、家に入り、ピシヤツと引

き戸を閉め、鍵をかける。

頭を下げる松田と竹山。

頬から汗がつたい、足元に落ちる。

松田の声「これで何回目だ？ にじゅう、ろ

く、いや、しち？」

○コンビニ・店内

イトインコーナーで松田と竹山が冷たいドリンク片手に呆けた顔をしている。

店内では店員の佐倉晃太（22）が品出しをしている。

松田の声「来年には着工が確定している道路拡張工事。それまでに立ち退き候補の家を立ち退かせて、測量、計画の再検討、工事の手配。もう時間が無い」

竹山、ため息をつく。

竹山「あと大橋さんのところだけなんですけどねえ」

松田「仕方ないよ。あの人たちの言い分もわかる」

竹山「でも大橋さん、話聞く気ないですよね」
松田「竹山」

松田、シイっというジェスチャー。

晃太、ちらっと松田たちに目をやる。

竹山、ひそひそ声で

竹山「松田さんのご両親はご健在ですか？」

松田「なんだよ、急に。ご健在じゃないよ。」

もう二人とも墓だよ」

竹山「そうなんすね。僕ね、胸が痛いんですよ。自分の親が強制退去なんて目にあつたらと思うと。このまま対話に応じてもらえないと、」

松田「行政代執行な」

竹山「高齢者を無理矢理退去させるなんて、無茶ですよ。ショックで死んじゃったらどうするんですか」

松田「うるさいんだよ、竹山は」

竹山「大橋さんのところはお子さんいないんですでしたっけ」

松田「息子がいたけど亡くなったらしい」

晃太、じいっと松田たちを見ているが、
ドアチャイムの音に

晃太「いらっしやいませ」

史子が荷物を持って入ってくる。

晃太、史子を見て笑顔になる。

晃太、レジに入り、ちらっと松田を見るが、松田は気づかない。

史子、荷物をレジ前に置き、

史子「こんにちは。これ送ってくださいか？」

晃太「はい。割れ物など入ってますか？」

史子「いいえ。六月なのに蒸し蒸しするわね」

晃太「ほんとですnee」

史子「今日は大学はお休み？」

晃太「そうなんです。それでバイトを」

史子「お疲れ様」

史子、料金を払うとレジから離れる。

晃太が史子を呼び止める。

晃太「あ、大橋さん！」

松田、ハツとして

松田「大橋？」

松田、ふりかえって史子を見る。

史子、振り返る。

史子「はい？」

晃太「すみません、品名が書いてなくて」

史子「あらやだ、私ったら」

史子、松田に気づく。

松田と竹山、挨拶する。

史子、困ったように会釈する。

晃太、両者を見比べる。

○公園

早足で歩く史子。

追いかける松田と竹山。

松田「大橋さん、待ってください」

史子、振り返って

史子「追いかけてこないでください」

松田「お話だけでも聞いてもらえませんか。

三分、いや一分でもいいんで」

史子「主人に叱られるんです」

松田「お家のことですよ。奥様にも関係ある

でしょう」

史子「わかってます。道路を広げるから、あ

そこを立ち退けて言うんでしよう。お断

りします」

竹山「その、お断りができなくなるんですよ、

大橋さん」

史子「お断りしたら、お断り！」

松田「大橋さん」

史子「私たちもう八十なんです。あと何年生きるか。私たちが死んだら好きにすればいいでしょ。それまではお・こ・と・わ・り！」

竹山「だから、それが」

史子「これ以上しつこくしたら、警察呼びますよ」

竹山「警察？ 僕、市の職員ですよ」

史子「呼びます！」

史子、スマホを構える。

松田「わかった！ わかりました！」

松田と竹山、手を挙げて参ったのポーズ。

史子、いまいましそうに松田たちを見て、帰っていく。

松田、竹山の肩を叩く。

竹山「すいません、張り切りすぎました」

松田「いいよ。帰るか」

松田、竹山の鞆を見て、

松田「あれ、それ、竹山の鞆だよね」

竹山「そうですけど」

松田、自分が鞆を持ってないのに気づき、

松田「しまった。忘れてきた。コンビニだ」
走り出し、戻ってきて

松田「先、歩いてて」

○コンビニ・店内

イトインコーナーを探している松田の前に鞆を突き出す晃太。

松田、笑顔で

松田「ありがとう」

晃太、鞆を引っ込める。

松田、真顔になる。

晃太、松田に顔を近づけて

晃太「さっき大橋さんに何してたんですか？」

松田「え？」

晃太「大橋さんの後をつけてったよね。何し

てんの？ 高齢者狙った詐欺だろ」

松田、笑って。

松田「違うよ。びっくりするなあ」

晃太「違う？ じゃあ何だよ」

松田「ああ、えっと、僕は市の職員で」

晃太「あれか。市役所の方からやってきました、ってやつか」

松田、真顔になり、名刺を出す。

松田「違います。ちゃんと、市役所の、中からやってきました」

晃太、名刺を眺め

晃太「ほんとかよ。信じられねえな」

松田「信じてもらわなくてけっこう。君には関係ないよ」

松田、鞆をとろうとするが、晃太、鞆を掲げ、

晃太「市の職員さんの鞆には一体何が入っているのかなあ。ひよつとして持ち出し禁止のデータを外で仕事しようとして持ち出したり」

松田、顔色を変え、

松田「ストップ ストップ」

晃太、うなずく。

松田「なんなんだよ。何が狙いだ」

晃太「大橋さんに何の用があるのか教えて」

松田「守秘義務があるから無理だよ。だいた

い君、大橋さんの何なの？ ただのコンビ

ニの店員とお客さんの関係でしょ？」

晃太「それはどうかな」

松田「え？」

チャイムの音。

晃太、営業スマイルになり、鞆を隠す。

晃太「いらっしやいませ」

松田「ちよつと、鞆返して！」

松田、入ってきた木島(50)に突然、

商品ケースに押しつけられる。

驚く松田。

松田「はい？」

木島「おまえ、市役所のやつだな？」

松田「ええと、お名前を伺っても？」

木島「木島だよ」

松田「木島さん。お世話になっております」

木島、怖い顔を松田に近づける。

びびる松田。

×

×

×

松田が木島に追い回され、コンビニの
中を逃げ回っている。

木島「ちよっと留守にしてる間に、家に入り込んで、老人だまくらかして、立ち退きの書類にハンコ押させやがって。役所の人間がそんなことしていいのか！？」

松田「誤解です！だまくらかすなんて、そんなことしてない。木島さんにはちゃんと説明して納得して判をいただきました」

木島「親がお前に無理矢理サインさせられたって言ってんだよ！」

松田「それは嘘です」

木島「他人の親を嘘つき呼ばわりか？」

木島、松田を追いかける。

晃太、怒って

晃太「店の中でやめてください。外でやれよ！」

松田、逃げまどって

松田「お父さんは喜んでおられましたよ。この家は方角が悪いから引っ越したかったつて」

木島「嘘つけ！」

松田「嘘じゃありません！ 家族でよく話し合ってください！」

松田、隙を見て、店外に逃げていく。

木島、追いかけていく。

晃太、見送る。

× × ×

晃太の前に松田がやってくる。

松田の頬が赤く腫れている。

松田「鞆、返してくれる？」

晃太、どうしようか迷う顔。

○公園（夕）

ベンチで座る松田。

両親の写真をスマホで見ている。

晃太がやってきて覗き込んでいる。

晃太「次のカモですか」

松田、晃太に気がつき腹を立てて

松田「僕の両親の写真だよ。失礼な」

晃太「これ、お詫びです」

晃太、飲み物を松田に差し出す。

松田、受け取り

松田「いくら？」

晃太「いいです。お詫びですから」

松田「詐欺の疑いは晴れたの」

晃太「詐欺にしちや、マヌケですよね」

松田「いくら？ 僕ら、市民からもらっちゃ

ダメなんだ」

晃太「しっかり設定守ってるんですね」

松田「設定？」

晃太「市の職員」

松田「だから本当に」

晃太、松田の名刺を手に持って眺める。

晃太「〇〇市 都市整備部 都市計画課 松

田 慎司さん。本物？」

松田「本物！　どんだけ疑うんだよ」

晃太「なんで大橋さんに付きまとうんですか」

松田、晃太を見て

松田「佐倉くんだったかな、君は、大学生？」

晃太「そうですけど、なにか」

松田「佐倉くんはどうしてそんなに大橋さんのこと気になるのかな」

晃太、松田を見る。

○大橋家・玄関前

松田と竹山、並んで立っている。

松田、チャイムを鳴らす。

ピクリとも動かない戸。

ため息をつく二人。

× × ×

竹山「孫？　大橋さんに孫がいるんですか？
どこに？」

松田「近所にいるらしいんだよ。正確には大橋さんの死んだ息子さんの結婚相手の連れ子らしい。継子（ままこ）。だから実の孫で

はないな」

竹山「息子の継子。まままご？ ややこしいな。孫ってことにしときましよう。孫かあ。

大橋のじいさん、『この家は死んだ息子の思い出がいっぱい詰まってる』って言ってましたよね。孫が来てくれたら、話聞いてもらえたりしませんかね」

松田「たしかに、そうだな」

竹山「事情通じやないですか、松田さん。その情報はどこで」

○コンビニ・店内

晃太がパンを品出ししている。

松田がやってきて品出しを手伝う。

晃太「けっこうです」

松田「頼みがあるんだけど。おじいさんとおばあさんを君から説得してもらえないかな、あの家を立ち退いた方が皆のためだって」

晃太、松田を見て

晃太「僕、本当の孫じゃないんで」

松田「大橋さんの息子さんの結婚相手の連れ
子なんだろう、君は？　じゃあ、孫でいいん
じゃないか」

晃太「血が繋がってないし。それにちゃんと
名乗ったこともないんで。まあ、他人すね」

松田「じゃあ、なんでこのコンビニでアルバ
イトを？」

晃太、嫌そうに松田を見て

晃太「たまたまです」

松田「たまたま？　大橋家の近所？」

晃太「たまたまです」

松田「オーナーに聞いたけど、君、電車に乗
り継いで遠いところからここに通ってるそ
うじゃないか、わざわざ。本当はおじいち
ゃん、おばあちゃんに会いたかったんだ
ろ？」

晃太「だったらなんですか。説得なんてしま
せんよ」

チャイムの音がして晃太、レジへ。

晃太「いらっしやいませ」

松田、悔しがるが、何かに気づく。

左手に包帯を巻いた史子が弁当の棚の前で、カゴを持ち困っている。

松田、史子に近づいて

松田「大橋さん」

史子、きまり悪そうに

史子「あら、松田さん」

松田「手、どうされたんですか？」

史子、もじもじして言葉を選びながら

史子「嫌だわ、お恥ずかしい。骨折したんですの」

松田「骨折ですか？ それは大変ですね」

史子「廊下で滑ってしまいましたね。この間、廊下に艶出しなんとかってのをしましたら、まあよく滑るんですの。昨日思い切り行っ
てしまいました、これです」

松田「わあ、痛かったでしょう」

松田の言葉に史子、うれしそう。

史子「痛いんです。ズキズキして眠れないんです。もう料理どころじゃなくて、お弁当

を」

松田「大変ですね。(気づいて)よかったらお家までお持ちしましょうか」

レジの晃太、目を丸くしている。

史子、驚いて

史子「とんでもない！ お弁当くらい持てます！」

○大橋家・玄関前

重 そうなものが入ったコンビニ袋をいくつも下げた松田が史子と一緒にやってくる。

史子「ごめんなさいね、ちょうどお米が切れそうだったのを思い出して。あなたがいてくれて良かった。暑いのに、ほんとごめんなさい。上がってお茶でも飲んでって」

松田、驚いて。

松田「え、上がってよろしいんですか？」

史子「今日は特別」

史子、チャイムを鳴らす。

史子「ちよつとあなた、あなた！」

下着姿の充男が水の入ったバケツを持って出てくる。

充男「遅かったじゃないか」

史子「嫌だ、あなた何、そのかつこう」

充男「何って洗濯だよ。(松田を見て)あ、お

まえ、何しに」

充男、バケツを持ったまま松田に詰め寄る。史子、あわてて

史子「嫌だ、あなた、違うの、違うのよ」

松田「大橋さん、違うんです」

充男、松田の頭から水をかける。

史子「ちよつともう！ 違うって言ってるのに！」

○大橋家・リビング

サイズの合わないシャツを着た松田が

ソファに座っている。

ふと窓から庭を見る。

窓から見える一本の木に白い花が咲い

ている。

史子、後ろから

史子「あれはね、南天の木。白い花が咲くの」

松田「ああ、南天ですか。綺麗ですね」

史子「息子が生まれた年に植えたのよ」

史子、寂しそうに

史子「昔はね、綺麗な赤い実をつけたのに、いつからか、なくなっちゃったの」

松田「あの、息子さんはどちらに？」

史子「息子は死にました。二十年前に」

松田「そうでしたか、すみません」

史子「(松田の服を見て)やっぱり大きいわね、ごめんなさい。主人のサイズしかなくて。

早く乾かすわね。ちよつとあなた。お茶まだですか？」

充男がお茶の入ったコップを三つ乗せたお盆を恐る恐る運んでくる。

史子「まあまあ、そんなゆつくりと運んで。

あなた、こういう時にね、家事をやってるかどうか分かるんですよ。ねえ、松田さ

ん？ 松田さんはご結婚は？」

松田「僕はまだで」

史子「やっぱり、そうだと思った。じゃあ、ご自分のことはご自分でなさるのよね。立派よ。それに比べてこの人は何にもできない！」

充男、仏頂面で

充男「トースト焼いただろ？」

史子「そうだった。悪魔のように黒いトースト！」

松田、二人を見比べ微笑むが、ふとうつむく。

考え込んでいる松田。

松田、顔を上げると充男と史子が心配そうにのぞき込んでいる。

史子「怖い顔してたけど大丈夫？」

松田、微笑む。

× ×

松田と充男・史子夫妻がソファに向かい合って座っている。

松田「残念ですが、もう道路拡張工事は決定されている事項です。大橋さんが長年慣れ親しまれた土地を離れたくないお気持ちはよくわかります。ですが、お宅の前の道路は通行量の割に道路幅が狭く、対抗する車同士の接触事故が絶えず、また登校する小学生の子どもが巻き込まれる事故も懸念されます。地域の利益のために、なにとぞ」

充男「松田さん。僕たちはね、よくわかってるんですよ。道路が拡張されて便利になったらきつと地元の人が喜ぶんだろうなつて」

史子「そうね」

松田「それでしたら」

充男、手を振って

充男「きつとよその人は僕たちが立ち退き料を吊り上げるために立ち退きを渋っていると思っっているんでしょう」

松田「そんなことは」

充男「何もわかつちやいないんだ、そういう

人は。あんたも。そういうことじゃないんだ。僕たちはここを離れるわけにはいかないんだ」

史子「そうね」

松田、ふと窓の外の南天の花を見る。

松田「お住まいが変わることが不安ですよね」

充男「もちろん、それもあるが」

史子「私たちはただ、ここを離れたくないんです。そうよね、あなた？」

充男、史子を見て黙っている。

松田、二人を見て思案する。

○公園

ベンチに座り、スマホの両親の写真を
見ている松田。顔を上げ、

松田「帰るか」

ふと、辺りを見回す。

松田「あれ、鞆。鞆……。まただ！」

松田、走っていく。

○コンビニ

晃太がレジで接客している。

松田が息せき切ってやってくる。

晃太「お取り置きしておきましたよ、鞆」

松田「よかった」

レジ前に座り込む松田。

晃太「取りに来なかったら市役所に届けよう

かなって思ってたんすよ」

松田「それだけは勘弁して」

晃太「今度やったら届けますね」

晃太、鞆を松田に渡す。

松田、鞆の中を確認する。

松田「あっ！」

晃太「何も触ってないですよ！」

松田、頭を抱えて

松田「スマホ、大橋さんのお宅に忘れてきた」

晃太「え！ 大橋さんのお宅入れてもらえた

んですか？」

木島が顔を出す。

木島「おい、公僕」

びびる松田

松田「なんですか。暴力はやめてください」

木島、申し訳なさそうに

木島「ごめん。親にちゃんと聞いたら『父ちゃんが乗り気だった』って母ちゃんの証言が飛び出してさあ、もうびっくりよ」

松田「そうですか」

木島「痛かった？ ごめんな？」

松田「わかっていただいでよかったです」

木島「ところでさあ、あんた、今、大橋さんのところの話してたよな？」

松田「なにか？」

木島、松田の肩に手を回し、

木島「秀、帰ってきてた？」

松田「しゅう、って？」

木島「息子だよ、大橋さんの一人息子」

晃太、真顔になる。

松田「息子さんは……たしかお亡くなりになったんでは？」

木島、驚いて松田を締め上げる。

木島「亡くなった？　いつだよ？」

松田「二十年くらい前だそうです。苦しい」

木島、あきれて松田を解放する。

木島「なーんだ。まだそんなこと言ってんのか、じいさん。それはフェイク」

松田「フェイク？」

木島「かけおちしたの、秀ちゃんは。おじさんおばさんに結婚反対されて」

松田「そうなんですか！？」

松田、晃太を見るが、晃太、知らん顔。

木島「俺、同級生だもん。二人が愛し合っているって言うのにさあ、絶対、結婚認めなかつたんだよ、あの鬼夫婦は」

松田「はあ」

木島「結局、大事な息子は駆け落ちして、二度と会えなくなつたんだから、バチが当たつたんだよな。ざまあみろ」

木島、出て行く。

松田、晃太に

松田「え、てことは、君のお父さん、生きて

るの？」

晃太「ちよつと覚えてないですね」

松田「ふざけないで教えてくれよ。お父さんが生きてるんなら、実の息子のお父さんに大橋さんの説得をお願いできないかな？このままだと行政代執行されて、無理矢理家を出されちゃうんだよ」

晃太「松田さん。ことはそう簡単じゃないんですよ」

松田「どういうこと？」

チャイムの音。

晃太「いらっしやいませ」

晃太、松田から離れる。

松田「おい、聞いてくれよ！」

○大橋家・玄関前

晃太が1・5リットルのペットボトルが入った袋を持ち立っている。

引き戸が開くと左手に包帯を巻いた史子が立っている。

史子「悪いわね、運んでもらって」

○大橋家・リビング

史子、笑顔で晃太をリビングに案内してくる。

晃太、リビング入ると足を止める。

史子「さ、どうぞ。ペットボトルはテーブルに置いて。重たかったでしょう」

晃太「いえ」

史子「あの人は留守なの。朝から図書館。以前はね、この辺にもお友達がたくさんいたんだけど、この年でしょ。一人亡くなった、一人、お子さんと一緒に住むために出て行った、皆いなくなって、もう私の家だけ。寂しいのよ」

晃太「息子さんが帰ってきたらいいですね」

史子、晃太を見る。

史子「あら、言ってなかったわね。息子はね、死んじゃったの」

晃太「すいません」

史子、飲み物を用意しようとする。

史子「秀が、あ、息子の名前なの。秀が帰ってきたら、そうね、寂しくないわね。あの世から帰ってきてくれたらいいのにね」

晃太「あの世か」

史子「晃太さんはおいくつ？」

晃太「21です」

史子「そう。秀がいなくなったのもそのくらいだったなあ」

晃太、史子をちらちら見ているが

晃太「あの」

史子「なあに？」

晃太「実は俺、いや僕」

史子、晃太をじっと見る。

晃太「僕、大橋さんの隠れファンなんです」

史子「ええ？」

晃太「いつも上品な方だなあって」

史子、笑い出す。

史子「まあ、どうしましょう。若い男性にそんなこと言われて緊張してきちゃったわ」

史子、飲み物をこぼす。

晃太、あわててテーブルの下を拭こうとして、史子と顔を合わせる。

はにかむ史子。

充男が本を抱えて帰ってくる。

充男「おい、帰ったぞ」

充男、史子と晃太を見て、本を落とす。

史子、あわてて

史子「あなた、お帰りなさい」

充男、立ち上がった晃太につかみかかる。

充男「うちの妻に何するんだ」

晃太「何もしてません」

充男「嘘つけ」

史子「あなた、やめて！勘違いよ。買い物運んでくれたんですよ」

充男「なんで家に上がり込んでるんだ」

史子「私が誘ったのよ。いいじゃない、ばばあだって若い男性とお茶したいんです」

晃太につかみかかっていた充男、突然

うめいて胸を押さえ倒れる。

晃太「え？」

史子、呆気にとられるが、充男に駆け寄る。

史子「あなた！？ どうしたの？」

晃太「おじいちゃん！」

史子「あなた！」

晃太、スマホで電話をかける。

晃太「もしもし！ 救急車お願いします。人が倒れました」

○大橋家・リビング（日替わり）

顔色の悪い充男、史子の肩を借りてよろよろ入ってくる

史子「よかったわね、ここに帰ってこれて。

死んじゃうかと思った」

充男「全くだ」

充男、ソファに座る。

史子「本当にあの時、コンビニのお兄さんがいなかったらどうなってたか。こんど、ち

やんとお礼言ってくださいよ」

充男黙っているのを見て

史子「お茶いれますね」

充男、史子を呼び止めて

充男「なあ」

史子、充男を見る

充男「ここを売らないか？」

史子、充男をじっと見る

充男「やつらにここを売って、貯金と合わせ

たら二人でホームに入れるんじゃないか。

ホームじゃなくても介護付きマンションな

んてのもあるらしい」

史子、うつむく。

充男「倒れてみて、つくづくわかったよ。心

配なんだ。君を一人残していくのが」

史子、両手で顔を覆う。

史子「情けない」

充男「すまない」

史子「違うの。私がよ。ああ、情けない。あ

なたがいなくて、私一人でこの家にいるの

がどんなに怖かったか」

充男、茶化して

充男「史子にも怖いなんてことがあるのか」

史子「そりやありますよ。失礼しちゃう」

充男「僕はね、君が僕がいなくなった後に、不安になったり悲しんだりしてほしくないんだ。君には安心して過ごしてほしい」

史子「あなた、ご自分の心配なさったら」

充男「僕はもう後は死ぬだけだ」

史子「何でそんなこと言うんですか！」

史子怒っている。

史子「私のためだって言うんなら、一分一秒でも、私より長く生きてくださいよ、なによ、私一人置いていく気満々で、ずるいのよ」

充男「史子」

史子「この家だって、意気地のない、絶対売らないって息巻いてたじゃないですか。がんばってよ」

充男「君が悲しむだろうと思ったんだ。秀が

帰ってこれなくなるだろう」

史子、悲しい顔をして

史子「あの子は勝手に出ていったんです。好きな相手と結婚したいって。勝手に出ていったんです」

充男「僕も若かったから。ろくに社会で働きもしないうちから結婚するだのなんなの。一人前の男になってから言え！って怒鳴ってやった」

史子「私も怒鳴りました。当たり前ですよ、あんな子どもみたいな時に結婚なんか。あちらの親に顔向けできなかったわ。でも、それから二十年よ。二十年帰ってこない。きつともう、親のことなんか忘れてるんですよ」

充男「そうだな」

史子「そうですよ」

充男「じゃあ、もうここは売ろう」

史子、充男を見る。

史子「だめ、だめ、だめ」

充男「史子」

史子「絶対だめ！ この家は売らないの」

○コンビニ・店内

イトインコーナーで松田と晃太がドリンクを飲んでいる。

松田「世界一周？」

晃太「はい。休学して」

松田「そうかあ。正直あてにしてたんだけどなあ、君のこと。大橋さんを説得してくれるんじゃないかって」

晃太「実の子どもに頼んだらどうですか」

松田、晃太を見る。

松田「実の子どもって？ 大橋さんの息子さんの秀さんのこと？ 晃太くんのお父さん？ 頼んでくれるの？」

晃太「正確には僕の、元・父親ですね」

松田「元？」

晃太「秀さんはもう僕の母親とお別れしてるんです。今は一人で暮らしてます」

松田「そうなんだ。一人暮らし。あー、ちょっとそれはまずいかなあ」

晃太「何がですか」

松田「いや、こっちの話なんだけど、僕らはあの家を大橋さんに立ち退いてほしい、けれどそこに晃太くんのお父さん・秀さんが現れて、もしだよ？ 万が一、皆で一緒に住もうってなったら益々退去しにくくなっちゃう」

晃太「それだ」

晃太、ひらめいた顔。

松田「それだ？」

晃太「いただきました」

松田「え？ まさか？ ちょっと、だめだよ？」

晃太の肩をつかむ松田。

○大橋家・玄関前

玄関を背にした充男と史子に晃太と松

田が向かい合っている。

充男と史子が驚いた顔。

充男「秀を連れてくる？」

松田「はあ」

充男「あの子は近くにいろの？」

松田「そうみたいです」

充男「どうして」

松田「それは彼に聞いてください」

晃太「僕です。僕が個人的に秀さんを知ってるんです」

充男「君は」

松田「大橋さん。もし秀さんが帰ってきたら、

受け入れられますか？」

充男「そうだな……」

史子、充男を遮る。

史子「連れてきてください」

充男「史子」

史子「連れてきてください、あの子を」

晃太、史子の手を握る。

晃太「待っててください」

走り去る晃太。

見送る松田、充男と史子。

○大橋家・リビング

史子が玄関を気にしている。

充男、本を読んでいる。

充男「落ち着きなさい」

史子「落ち着いてます。あなたこそ、本、同

じページを何時間読んでいるんですか」

充男「じっくり読んでいるんだよ」

チャイムの音。

充男と史子を顔を見合わせ、

我先にと出て行く。

× × ×

二階を心配そうに見上げている松田。

うなだれている晃太。

充男が麦茶を三つ運んでくる。

充男「やっぱり秀は来なかったな」

晃太「すみません」

松田「どうして来なかったの？」

晃太「大橋さんが一緒に住もうと言ってる」

松田「ちよっと、それ」

晃太「いいじゃないですか。お父さんお母さんから会いたいと言ってる、と聞けば、行く気になると思っただんです。一度はその気になったんですが、いざとなるとやっぱり」

充男「そうか」

晃太「期待させてすみません」

松田「史子さん、大丈夫ですか？」

充男「だいぶショックを受けたようだね」

晃太「申し訳ないです」

充男「いいんだよ。僕は正直、来るわけないと思っただんだ。あの子はきっと僕たちを恨んでいるだろうからね」

晃太、顔を上げて

晃太「秀さんは恨んでなんかいません」

充男、晃太を見る。

充男「恨んでない？ それはないよ。恨んでいるに決まってる」

晃太「大橋さんこそ、秀さんのかけおちした相手を恨んでるんじゃないですか？」

松田、ハツとして晃太を見る。

充男も晃太を見る。

充男「いや。それはないよ。むしろね、申し訳ないと思っている」

晃太「秀さんは、実はしばらく前から鬱みたいになっていて、会社も休職していて、あまり精神状態が良くないんです」

松田「晃太くん、もしかしてそれでご両親と会わせようかと？」

晃太「はい」

充男、まじまじと晃太を見る。

充男「君はいくつ？ 二十歳くらいか？」

晃太「二十一です」

充男「君は秀のなんなんだ？ ひよっとして君は秀の」

充男、晃太をじっと見る。

晃太「二十年前、僕の母親と秀さんが駆け落ちしました。僕は母の連れ子で」

充男、大きく息をつく。

充男「君が、あの時の。すまなかったね、君のお母さんには」

晃太、頭を下げる。

松田、じっと晃太を見る。

充男、立ち上がり、二階の史子に呼びかけている。

充男「史子。起きてごらん。びっくりするところがあるよ」

充男、出ていく。

松田「ああ」

晃太「松田さん、ごめんね。巻き込んで」

松田「違うんだ。うらやましいんだ」

晃太「うらやましいって？」

松田「後で話すよ」

充男の声「史子、具合悪いのか？ 史子？」

あわただしく階段を駆け下りる音。

松田「どうしたんだろう」

充男、血相を変えている。

充男「史子がいな」

驚いて腰を浮かす松田と晃太。

×

×

×

疲れて外から帰ってくる充男と晃太。

晃太「大丈夫ですか。座ってください」

充男「史子、どこへ行ってしまったんだ」

晃太のスマホに着信。

「市の職員」の表示。

晃太「もしもし、松田さん？」

晃太、充男に

晃太「史子さん、見つかりました。(電話に)

そこどこですか？ 公園？ すぐ行きます」

出かけようとする晃太を充男が引き止める。

充男「わしも行く」

○公園

ベンチに史子が座っている。

横に松田が立ち、遠くに手を振っている。

松田「こっちはです」

晃太、走ってくる。

晃太「史子さん」

松田「(史子に)大橋さん、暑いですからお家に帰りましょう。こんなところにいたら熱中症になりますよ」

史子、黙っている。

松田「僕、何か飲み物を買ってくるよ」

晃太「お願いします」

充男が到着する。

充男「史子、こんなところにいたのか」

史子、黙っている。

充男「史子、僕たちの家に帰ろう」

史子「『僕たちの家』。秀が帰って来てる？」

充男「秀は、いない」

史子「じゃあ、私は『僕たちの家』に帰らない」

充男「史子」

史子「帰らない。もう死ぬまでこうしてる」

晃太、史子の前へ行く。

晃太「史子さん。ごめんなさい。僕、説得し
たんです。けど、今さら合わせる顔が無い
って、秀さん」

史子、顔をあげて晃太を見る。

史子「あなた、秀のなんなの？」

晃太「昔、秀さんは僕のお父さんでした。血はつながってないんですけど」

史子、ハツとして

史子「あの子、お父さんしてたの？」

晃太「すごく楽しいお父さんでした。仕事に行く前も、帰ってきてからもたくさん遊んでくれて」

史子と充男、顔を見合わせる。

充男「僕はあまり、遊んでやらなかったからなあ。秀は自分が僕にしてほしかったことを君にしてあげたのかもしれない」

史子「そうかもね。私たち、秀に厳しかったから。秀は寂しかったのかもね」

史子、晃太の顔を見て

史子「血が繋がってないの？ でも秀によく似てるわ」

晃太「うれしいな」

晃太、涙をふく。

史子、晃太に

史子「もし嫌じゃなかったらハグさせてもらえないかしら。孫として」

晃太「もちろんです」

史子、晃太と充男、ハグをする。

晃太、涙ぐみながら

晃太「おじいちゃん、おばあちゃん。秀さんを助けてください。秀さんはもう限界なんです」

充男と史子、顔を見合わせる。

松田、難しい顔をする。

○大橋家・玄関

松田と大橋秀（40）が玄関前に立っている。二人とも喪服。

引き戸が開き、喪服姿の晃太が出迎える。

秀、驚いて

秀「晃太。なんでここに？」

松田「僕からご連絡させていただきました」

秀「連絡って、なんでこの子に？」

晃太「とにかく入って。人目があるから」

中に入る松田と秀。

晃太、辺りを見回し、戸を閉める。

○同・リビング

布団が二枚敷いてあり、それぞれ充男と史子が死装束を着て、横たわっている。顔の上に白い布。

枕元に百合の花が活けてある。

秀、キョロキョロしながら入ってきて

布団を見て足を止める。

後から松田と晃太、入ってくる。

秀「それ、親父とおふくろですか？」

松田「はい」

秀「二人とも同時に？」

松田「はい」

秀「なんで？ 事故？ 病気ですか？」

松田「それは私の口からは何とも」

秀、晃太を見る。

晃太、首を振る。

秀「マジかよ。こんなことって。この間、会いたいって言われたばかりなのに」

晃太「秀さんに最期に一目会いたかったのかもね」

秀、顔が強張る。

松田「お顔、見られますか？」

秀、じつと二人を見るが

秀「いえ、俺、二人に合わせる顔無いんで」

晃太「まだそんなこと言ってるの？」

松田「まあまあ。秀さんが帰ってきてくださって、お二人ともきつと喜んでくださってますよ、ね、晃太さん」

晃太「死んでからじゃ意味ないんだよ」

目頭を押さえる晃太。

秀、松田に

秀「自分の部屋見てきたいんですけど」

松田「ああ、どうぞ、って僕が言うのも変です
すね」

晃太「自分の家だろ。勝手にしたら」

秀、何か言いたそうだが、出て行く。

松田「大橋さん、いいですよ」

充男と史子、起き上がる。

顔を見合わせている。

晃太「大丈夫？ 辛くなかった？」

充男「いや大丈夫」

史子「あの子の声、何年ぶりかしら。あんな声だったかしら」

充男「もう二十年も前だ、別れたのは。声だって変わるよ」

史子、にっこりして

史子「でもちよっと楽しかった」

充男「（うなずく） そうだよな。昔を思い出して」

史子「よく家族でおどかし合いしてたの」

晃太「そうなんだ」

充男「秀が隠れるのがうまくて、誘拐されたんじゃないかと思って青くなって探したよ」

史子「そう、ほんとあの子隠れるのが上手いの……ちよっと大丈夫かしら、上」

晃太、見に行き、

晃太「まだ大丈夫」

充男と史子、顔を見合わせ苦笑する。

充男「しかし、秀め。親が死んだって聞いて
やっと来たか」

史子「そうね、やっと帰ってきた」

松田「きつとキツカケが必要だったんですよ」

晃太「意地っ張りだから、引っ込みがつか
なくなっちゃったんだよ、きつと」

史子、深いため息をつき、

史子「私たちもよ」

充男「そうだ。いつものように、しばらくし
たらひよっこり帰ってくると思ったんだ。

それ、その扉から」

全員扉を見る。

秀が出てくる。

史子、口を押さえる。

充男、秀を凝視する。

秀「だと思った。芝居下手すぎるだろ」

秀、横を向いて

秀「あのさあ、俺が出て行ったの二十年も前
なのよ。俺の部屋、散らかったままじゃん。

片付けといてよ」

史子「何言ってるの！」

秀、史子を見る。

史子「二十年も散らかしっぱなしで。(弱弱し

く) さっさと片付けてよ」

充男「秀」

秀、充男を見る。

充男「元氣だったか」

秀「ああ。何とかやってきてたよ」

充男「そうか」

充男、秀の前に行き、

充男「二十年前はすまなかった」

充男、頭を下げる。

秀、首を振って

秀「今さら頭なんて下げないでよ、親父」

充男、わっと泣く。

史子、秀の前に出て

史子「おかえりなさいって言うべきかしら」

充男「史子」

秀「俺はこの家を捨てた人間だから、今さら」

史子「バカ！ バカバカバカ！ おかえり！

あなたの家よ！」

秀、目をうるませて

秀「お母さん。ただいま」

充男、史子、秀、抱き合って泣く。

横で微笑んでいる晃太に気づき、史子。

史子「晃太くんも来て」

秀「そうだ、晃太。おいで」

晃太、ふっと顔を歪ませる。

晃太「秀さんに晃太って呼ばれるの久しぶり

だな」

四人で抱き合う。

松田、手を叩きながら微笑んでいる。

晃太、顔を上げて

晃太「松田さんも」

松田、驚いて手を振る。

松田「僕はいいよ。部外者だから」

晃太「だって松田さんのおかげだよ」

史子「そうですよ。あなたがここを立ち退けて粘ってくれたおかげですよ」

松田、苦笑いするが、輪の中に入る。

○大橋家・玄関前

松田、外に出る。

日の光に目を細める。

ふと、スマホを開き、両親の写真を見て、寂しく微笑む松田。

死装束の充男、史子と晃太、秀、揃ってがやがやと出てくる。

史子、松田に

史子「松田さん、ここまで粘ったんだから最後この家を取り壊すところまで見届けなさいよ」

松田「それは……ちよつとわからないです」

晃太「おばあちゃん、松田さんだって暇じゃないんだよ」

秀「すいません、わがままで」

史子「わがままなの、私？」

松田「はは、いやあ、できれば立ち会いたいですが、変な話ですけど、僕もこの家に愛着が湧いてしまっただけ」

史子「あら」

充男「おい、僕たちの涙を無駄にしないでくれよ」

史子「松田さん、ご実家は？」

松田「もうありません。両親が亡くなった後、取り壊されて。打ち明け話をする、僕も両親と折り合いが悪くて。でも関係を修復する前に逝ってしまいました」

史子、松田の前に進み、

史子「いつでも来ていいのよ、松田さん。自分の家だと思って」

松田、微笑む。

松田「ありがとうございます」

充男「おいおい、子どもを何人作るつもりだ」

史子「いいでしょ？ 新しい家にも百合を植えるつもり。秀も晃太くんも時々老人の顔を見に来てね」

晃太、秀をつつく。

晃太「秀さん、二人と一緒に住んだら？」

秀「えっ」

松田「ちょ、晃太くん、それは」

充男「そりゃ、いいな」

秀、困ったように晃太に

秀「この年で親と住むってないだろ」

晃太「この年だからでしょ。二十年越しの親

孝行しなよ」

充男「これは立ち退きは取りやめだな」

松田「ええ！ ちよつと待っててくださいよ」

困り果てた松田の顔。

皆の笑い声が空に響く。

(終)